銀鈴

第三十二號

明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回廿五日發行）
明治四十一年五月二十五日發行

銀鈴

第參拾貳號
明治四十一年五月二十五日發行

若葉

京、奈良の旅にてよめる

森脇桃村

月出づと八坂の塔を指させる玉の手近く頰はよせしかど

せちになは君を思ひぬ上つ代に采女ゐりたる

池の汀に
春の雨蛇の目して行く京の子か傘の上にみる

朱き塔かな
あけぼのの雲のやうなるうすものに朱き帶する奈良少女かな

梟のなく音さびしみおん君に抱かれていねし山あひの宿

雲の宵梨の花ちる山寺に經よむ若き君思ふかな

春日野の若葉の下の石獅子の鬣ぬらし春の雨ふる

春の宵水ゆく欄に簾して扇を强し人を忘れず

卓上詩話 (三)

翠　激

■「舊套を脱せよ」これ新時代の要求である。詩歌が久しい間、不活潑な狀態に在つたのは決して遠き過去の事實でない。止水は早く腐敗するものだ。詩歌が文學といふ範囲を放れて、殆んど手を下し難いばかりに、墮落した時代を承けて、立つた我等の責任は、實に重且つ大なりだ。

■我等はまた常に詩壇の現勢に注意を拂はねばならぬ。思潮の變化と共に、いかに形式―技巧が轉遷しつゝあるかを知らざる作家ほど憐むべきものはあるまい。

■我等の現に目擊するところによるも、明星派三十五六年頃の詩風を摸して得々たる詩人が多い。佐々木信綱氏でさへ、この頃二三の歌人が試みるやうな、幼稚、拙劣なものを歌つて居ないではないか。

■技巧が調はぬ位で、何うして内容――思想に力あるものが出來よう。拮屈な句法を用ゐて、新派の歌成れりは恐れ入る。我等は中央詩壇の風潮に親まぬ人々を教へねばならぬ。

■詩歌は形式上の制約を忘れて存在するものでない。或る一派の人々が全然無技巧論の上に立つて議するは我等に何の痛痒を與へぬ。

散る花

吉田　櫻川

み手ふれし刹那轟くわが胸の雷といま潮鳴るをきく

伶人のおばしまにひく春の曲水あたたかに桃の花散る

彩雲のたなびく里に籠り居の君にまつらむ白百合の花

君をのみわれ世に戀ふと醜の蝶あつき涙をすみれにそそぐ

みそれつゝそらに魔形の火柱のひらめく夜なり君ゆく里は

白百合のはかなき夢に涙する朝を行くかな君とならびて

甲村　紫蝶

ああ小川盡きぬうらみに喜びに響け無窮の時を刻みて

春の雨緋桃かつ散る若き日を淑しと君もかこちまたふか

汝が戀の終焉はかくと夕陽は大森林のかげに沒しぬ

羊飼ふめぐし小女の角笛の靜かなる音と牧場は暮れぬ

紫　風

悲しみと喜びと相半して間なく戰ふ胸の苍に

『歌界時言』を讀む

素影

本誌前號に『歌界時言』と題して、松江の八千矛會に一矢を放つた閑古鳥君の一文を讀んで僕は近頃痛快に感じた。まことに君の言はる通り、全會の作物は『舊派の陳套を脱せむとして得ず、新派の嶄新を學ばむとして未だ能はざるもの』であつて、何等文藝上に價値を認むることは出來ない。試に全會が地方新聞に發表した前後四十幾回の詠草を繰つて見たまへ。果して其中に一首でもこれはと首肯し得られるものが現はれて居るだらうか。

中には、小學生徒にやらしても、も少しは氣の利いたものを作るであらうと思はれるやうなのが少くない。全体、彼等には未だ歌といふものが解せられんのだ。唯、出鱈目に三十幾文字を並べさへすれば、それであつぱれ歌のやうに思つて居るのだ。なんと情けないではないか。こんなことで、どうして時代思想と伴ふことが出來ようか……、といつて吾人は漫りに人を誹譏し以て自ら快とするものではない。とかく近來似而非詩人が跋扈して神聖なる文壇を汚すことが多いから、かたくゝ以てこんな苦言を吐いたのだ。失敬。

めぐる春

藤本晩花

麓路に行きまよふ子らをこのむれそを頂にわれは見てあり

春の宵君がまろ寢のおん袖にさくら吹雪す美しきかな

いと華奢によそひつくせる少女らの中にましると面はてりする

有井漱花

椰子の果の波間にうかぶ南の國に旅すと船は急ぎぬ

ゆく春の若葉の雨は紫の誦經の君がみ袖に降りぬ

丈あまる黒髪亂し狂態の少女せまると夢に戰ぐ

あわ彼の夜紅絹にうつらふ華かの燭にそむきて端座せし人

雲低うたなびく山の上にしてわれは覓めぬ君住む里を

誌友消息◎河野素陽は大坂市立商業學校に◎後藤藤郎は東京美術學校に◎三明千鳥は廣島高等師範學校に入學して各研讃に餘念なく◎森脇桃村は客月京坂地方に遊び◎土佐某は美しき君を迎へ◎藤本晩花は女兒を擧げ◎月森神來は本郡川下村へ轉勤せり

弱き心

白　江

それは暖い春の夕、しづ心なく散りし花の二片三片は、彼方の敷石、此方の泥土の上に、そよ吹く風を恨むかのやう、泥と梢を打守つて。自分は何心なくそれを眺めてゐたが、ふと、何とも言へぬ一種の氣におそはれて、思はないでもよい、いや、思ふまいと常からつとめて居る過去の悲慘な歴史がツイ頭の中に浮かんで來た。

自分は、一体、物事を、あんまり氣にせん性質である。過去の事件を再び繰りかへして、

兎や角と思ひ煩ふことも少し、未來については殆んど全く心配しない。で時にはあんまり無頓着だと人から評されるぐらゐであるが、妙にこの悲慘な歴史――自分の半生における最も悲慘な歴史――は、どうしても全く忘れてしまうことが出來ない、何かの緒があればすぐ思ひ出す。弱い、小さい、われながら愛想がつきるほどの心。

考へて見れば何でもないこと。何時まで美しく咲いてゐる花ではなし、風が吹けば散るのは當然だ。が、その當然が自分には、如何にも深い意味に考へられて仕樣がない。

障子を明け放しにしてフイと家を出た。霞に

罩められた遠山は、薄紫に彩つたやう、近く垂れた柳の枝は、風の弄るに委せてゐる。春を送るのであらう、蛙の聲はいとのどかに境の單調を破つて居る。折しも何處からとなく腸に泌み渡るやうな悲しい調子で謳ふ聲が、淡靄を突き破つて響く。自分はそれを傾聽するでもなく、せんでもなく、靜かにあたりを見まはした。日は最うずんぶり暮れてしまつて、散り殘つた櫻が闇に眞白い。自分は今の哀れつぽい滅入つた調子の歌を聞くと全時に

『わたしや最う死んでも構はんわ、ああ死にたい、併し○○さん、わたしがあなたを思つて思ひ死したつて、あなたはちつとも可

愛さうだとは思つて下さらなくつて？』

と言つた彼の人の最後の言葉を胸に浮べずには居られなかつた。

自分は實に何とも言へぬ悲哀を覺えて暫くそこに行んで居たが、突然に、

『其處で何をして御出る、早く歸つて御夕飯をお喰りよ』

といふ母の聲に驚かされて急いで部屋に歸ると、今まで洋燈の下で一心に編物の手を動かして居た妹が『兄さん』といつて莞爾と笑つた。その華かな顏その希望に輝いてゐる眼を見ては、自分の今迄の愁ひは何處へやら。(完)

火の冤

菅原紅雨

美き少女醜の少女が仝じ世に仝じ涙をねがふ
かろかさ
古き葉と新しき葉と籠に入れてわれは流しぬ
ゆく春の川
二十五年泣けとたまひし涙かやとばかり思ふ
君はあらぬか
夢に見る君が瞳と今われはかの蒼空の星に涙
す
敗殘のつはものあまた盾なめて君が砦にせま
るをたけび

大屋左一

あかつきを東にいそぐ七人は火の冕しぬ百合
の細道

河野翠瀲

ききたまへ君をめぐりて鳴る玉の妙なるひび
き春の日の雨
わが王よ宮の輕砂に牡丹さく卷の子らをまた
見たまふな
人々よわが黑髪に手な獨れそ君ただ卷けと匂
ふ七尺
塀に添ひながく歩みぬ盡くるなしいづれに一
の門はひらかむ

焔の涙

月森神來

船

船は行く！濃青の海を
血の如き赤き眞帆あげ
憧憬の丹の頰の子等に
棹とらさせて何方行く
「君おはす蓬萊島へ」

我もまた

我もまた君を追はまし
君ゆゑに我はながらへ
君ゆゑに我はうたひぬ
あはれ今君久遠に行く
我もまた君を追はまし

灯

灯はともる華かに
灯はゆれぬ搖々と
灯は消ねね忽然と
我は泣く君といふ
灯のきゑし空國に

椿

薄月夜、川原づたひ
白砂に魔の蹠形
點々と蹤血ぞ引ける

（ふと思ふ、魔の惡の血か
屠られし少女が血かと。）
歩をうつす十歩二十歩
ふと仰ぐ　高く　衝立つ
物の影。聽け火の吐息
沈鬱の　青き　呻吟を
又見よやぱたり〳〵と
地心うつ血の滴りを
あなあはれ破滅の風に
戰きぬ、椿の　大樹
滴りぬ。血はぽた〳〵と

（完）

▲寄贈新刊　△山鳩（四十八）……愛知縣若葉會
△涙花（四ノ三）……大坂硯友社　△朝虹（四ノ四）
……千葉縣朝虹會　△明笛（初號）……愛知縣文
學同志社

▲投稿募集　社の内外を問はず、文藝を愛
するの士は奮つて投稿せられよ。詩歌、俳句
、小説、美文、譯文、評論等、何にても苦し
からず、字詰、行數に制限なし。

▲社告　本號分の原稿には、編輯の都合上
次號へ廻したるもの少からず。

▲次號原稿〆切　六月十二日。

銀鈴　三冊郵稅共拾參錢六冊仝前金貳拾五錢
廣告料　一行拾錢　一頁壹圓　半頁前金六拾錢

明治四十一年五月廿三日印刷
明治四十一年五月廿五日發行　（銀鈴第卅二號）

島根縣邑智郡田所村大字下田所七三一
發行兼編輯人　河野岩雄

島根縣飯石郡赤名村大字赤名八二一
印刷人　木村柳三郎
印刷所　赤名活版所

編輯所　石見國邑智郡田所村下龜谷　銀鈴社編輯部
發行所　石見國邑智郡田所村下田所　銀鈴社事業部

明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回廿五日發行）
明治四十一年五月二十五日發行

文學雜誌 銀鈴
明治三十七年一月十四日第三種郵便物認可（毎月一回二十五日發行）
明治四十一年六月十五日發行
臨時增刊
次號は本月二十五日定期通常號發行

◎社告◎

畏敬する我が詞友諸兄

春の花ぞめ衣ぬぎ更へ候てより幾くもあらぬに、早や青春若葉の木蔭なつかしまれ候折柄筆硯益々御多祥に被爲渉、斯道のため欣悅此事に奉存候。

懷憶いたし候へば、わが文學雜誌「銀鈴」の初めてうぶ聲を擧げ候は、五とせの前、明治三十七年の初秋とおぼゆ候に、我等の疎漫懈怠を以て、常に刷新を辭明しつゝ、今に何等の改善を加ふる無く却つて小園内に蹋跡罷在、衷心甚だ慚愧に勝へず候。

元來、地方の純文學雜誌が、晨に起りて夕に仆るゝの多きは、畢竟、財政の維持困難なるに由來するものと存候。然るに、我等が這の間に處して、兎にも角にも第三十二冊を刊行し得たるは、聊さか誇るに足らん乎と自ら容し居るに候。

我等を誘導し鞭撻する僚友の二三は、毎に我等に論すに飛躍活動せんことを以てせられ候へども、我等は當初より、我等の力に適應せざる活躍を敢てし爲めに却て、中途、大挫折大困憊を招致せんことを虞れ、實は極めて堅實なる行路を取りたるに外ならず候處、已に本夏を以て滿四週年に達し候ため、來る八月號誌上、心ばかりの祝意を表し度、多少の計畫を有し候へば、この際我が詞友諸兄の贊助を請ひて、根本的大刷新を施し併せて基礎の確立を圖り度存念に御座候、爲其こゝに潛越を顧みず、本書を諸兄の梧右に致し候次第に有之候。微意御洞察の上、何卒左項により御援助被下候樣偏に希望仕度、斯くて弊誌「銀鈴」は爾後多少の面目を改め候ことゝ確信仕候。先は不取敢得貴意度、時下折角御愛玉、愈々清興を加へ給はんことを禱上候。敬具。

明治四十一年六月十五日

銀鈴社に於て

菅原紅雨
河野翠瀛

畏敬する詞友諸兄
侍史

（左項）
一誌費一ヶ年十二冊分五拾錢拂込
一特別社友社費一ヶ年分壹圓拂込

右何れをか御撰擇、六月三十日までに御納附被下度、若し全く御不賛成にも候はゞ苦だ勝手ヶ間敷て申上難き義には候へども同日までに其旨御一報被下度、實は往復葉書を以て得貴意候所存に候ひしも、本社財政上、從來の親交に甘へ、ワザと之を省き候次第御賢察幾重にも御容赦願上候。

○小爲替指定局、石見出羽郵便局
○指定受取人欄、石見邑智郡田所村　銀鈴社
○社費受領の時は受取証を別送すべし

◎文苑◎

河野翠瀛

郵便車

赤く塗りたる郵便車
誰が上ろこびの文のせて
さはなに急ぐ。郵便車。
されば數多の戀の歌
君へまゐると乘せて行く。

くちづけ

今一點の火を置きて
燃ゆるがごとし君が唇。
いな〳〵天の日を吸ひて
滿身は是、赤熱の
大擾亂にをのゝきぬ。

發行所　石見國邑智郡田所村　銀鈴社
明治四十一年六月十三日印刷
同　年六月十五日發行
同　同國同郡同村大字下田所七三二
編輯兼發行人　河野翠瀛
出版兼印刷人　同郡赤名村大字赤名八二二　岩本郎
印刷所　石見國邑智郡田所村大字下田所　銀鈴社